

ローマ帝国西部およびイタリアにおける 家族関係の比較研究

樋 脇 博 敏

はじめに

本稿は、ローマ帝国西部およびイタリアにおける家族関係のありようについて比較史の観点から考察を試みるものである。とは言え、古代の家族関係を比較検討するのは意外に難しい。何かを比較検討するときには、同質の、しかもある程度まとまった量のデータが必要となるが、家族関係のような日常風景が記録されることは少なく、関連する史料は偶然的・断片的なものがほとんどだからである。古代ローマの場合も例外ではないが、こうした劣悪な史料状況のなかにあって、唯一利用可能なデータが碑文史料であり、当該テーマを比較検討する際にはとりわけ墓碑が貴重な知見を提供してくれる。

ラテン語で刻文されたローマ期の墓碑の総数は、現在も新しい発見が続いているため、正確なところは不明であるが、R. MacMullen の推計によれば、『ラテン語碑文集成 (*Corpus Inscriptionum Latinarum*)』におよそ 15 万 6000 点が集録されており、このうち、著しい欠損を免れて判読可能なものは 2 万 5000 点ほどだという⁽¹⁾。ローマ期において墓碑建立の費用は、建立場所や墓石のサイズによってまちまちであったが、庶民層のそれはおそらく 100 セステルティウスもかからなかったと見積もられており、望めば大半の者が墓碑を建てることができただろう⁽²⁾。ローマでは、相続人(とりわけ息子)の義務として被相続人のために墓碑を建立することが半ば当然と考えられていたので⁽³⁾、また、多くのローマ人が自分の名や業績を後世に残したいと強く念じていたので⁽⁴⁾、元老院階層はもちろんのこと、一般市民も、そしてときには奴隷身分の者でさえ墓碑を建立していた。15 万点以上にものぼる墓碑が帝国西部にわたって広く残っているのはこのためである。

この大量の墓碑データを用いて、帝国西部の家族関係のありようを比較検討したのが、R.P. Saller と B.D. Shaw による共同論文「元首政期における墓碑とローマの家族関係：市民・兵士・奴隷」である⁽⁵⁾。同論文は、共和政末期から帝政前期にかけての墓碑を対象として、誰が誰に対して墓を建てたのかを調査し、そこにおいては核家族関係にある者が全体の 80% 前後を占めること(ただし、一部兵士は除く。表 1 参照)を明らかにした⁽⁶⁾。この発見により、昔は今とちがって大きな家族であったという、いわゆる「大家族神話」は覆され、それまでのローマ法制史中心の家族史研究の流れは大きく変わった。かくして、

Saller と Shaw によるこの画期的な論文は、今日の家族史研究の出発点において必ず読まれるべきものと位置づけられるに至ったのである。そこで、本稿においてもまずは Saller と Shaw の所論を導きの糸として帝国西部の家族関係のありようを簡叙し、次いでイタリア半島における家族のありようを探ってみたい。

第1章 帝国西部における家族関係

Saller と Shaw による共同論文は、そのタイトルにあるように、ローマ市民、奴隷、兵士の家族関係(誰が誰に対して墓を建てたのか)についてそれぞれ調査し、以下のような結果を得ている⁽⁷⁾。

表 1

ローマ市民		
時 期	対象地域 and/or 対象階層	核家族関係の割合
共和政末期	ローマ市およびラティウム地方	75%
帝政前期	ローマ市の元老院階層	72%
	ローマ市の元老院階層および騎士階層	77%
	ローマ市の下層民	78%
	ラティウム地方	77%
	Regio 11(イタリア北部)	79%
	ガッリア・ナルボネンシス	82%
	ヒスパニア	83%
	ブリタニア	80%
	下ゲルマニア	86%
	上ゲルマニア	89%
	ノリクム	91%
	ランバエシス(アフリカ)	91%
	アウジア(アフリカ)	91%
	カエサレア(アフリカ)	89%
	オスティア	82%

奴 隷		
時 期	対 象 地 域	核家族関係の割合
帝政前期	ローマ市	82%
	カルタゴ	85%
	ノリクム	85%

兵 士

時 期	対象地域 and/or 対象階層	核家族関係の割合
帝政前期	ローマ市の騎兵	29%
	ローマ市の一般兵	61%
	ブリタニア	40%
	下ゲルマニア	34%
	上ゲルマニア	34%
	ノリクム	76%
	パンノニア	73%
	ヒスパニア	71%
	ランバエシスの将校	81%
	ランバエシスの軍団兵	77%
	ランバエシスの退役兵	86%
	カエサレア	63%

Saller と Shaw が「核家族関係(relationship within the nuclear family)」と呼んでいるのは、夫が妻のために、あるいは妻が夫のために墓碑を建立している事例(the conjugal family)、親が子のために墓碑を建立している事例(the descending nuclear family)、子が親のために墓碑を建立している事例(the ascending nuclear family)、兄弟姉妹同士で墓碑を建立している事例(the siblings)の4タイプで⁽⁸⁾、ローマ市民と奴隷の墓碑ではこれら4タイプが70～90%を占める。

他方、兵士に目を転じれば、ローマ市の一般兵、ドナウ河流域のノリクムとパンノニア、ヒスパニア、北アフリカのランバエシスとカエサレアでは、これら4タイプが60%以上を占めるものの、ローマ市の騎兵、ブリタニア、上下ゲルマニアでは40%以下と低い。このような差異が生じている背景について Saller と Shaw は、ローマ市の騎兵、ブリタニア、上下ゲルマニアの兵士たちの出自を調査し、その結果、これらの兵士たちが各自の出身地から遠く離れた地域に駐屯していたことを指摘し、墓碑において核家族関係の割合が小さいのは、かれらが家族・親族関係から切り離されていたため、と説明している⁽⁹⁾。フラウィウス朝期以降、兵士をリクルートした現地に駐屯させるようになり、2世紀半ばにはそうしたシステムが定着したという Th. Mommsen 以来の通説⁽¹⁰⁾に対して、Saller と Shaw の所説は一石を投じるものである。

Saller と Shaw による共同論文は、帝国西部の墓碑に見える家族関係を調査し、(駐屯地が故郷と遠く離れていたという特殊事情を抱える一部の兵士は別にして)核家族関係がその大半を占めていることを実証した。これにより、時代を遡るにつれて家族形態は大き

くなるという Le Play 以来の進化論的家族変遷モデルを否定し、産業革命以前においても核家族が世帯の主流だったことを明かしたケンブリッジ・グループをはじめとする西洋中世・近世家族史研究の成果に接続させたことの意義はとりわけ大きいと評価されている⁽¹¹⁾。

Saller と Shaw はさらに、核家族関係の割合が大きい地域をそれぞれ比較して、ヒスパニアでは女性が墓の建立者として登場する割合が他の地域に比べて大きいことを明らかにした⁽¹²⁾。夙に知られているように、ヒスパニア(とくに北西部)では女性が日常の場面で際だった存在感を示していた。たとえば、慣習的に娘が相続人となっていたこと、結婚の際には夫が妻に婚資を贈っていたこと(ローマ社会ではふつう妻が夫に嫁資を贈っていた)、農業・鉱業・建設業等の重労働に女性も従事していたことをいくつかの文献史料が証言しているが⁽¹³⁾、こうした文脈のなかに墓碑から得られる知見を整合的に位置づけることができたのは、比較史の成果である。

同様に Saller と Shaw は、ローマ市の元老院階層と奴隷を含む下層民とを比較して、元老院階層においては子が親に対して墓を建てている割合が大きく、これに対して下層民においては子が親に対してではなく夫婦間で墓を建てている割合が大きいことを指摘し、相続をはじめとする家の承継が重要であった元老院階層では相続人の義務として子が親のために墓を建てていたのに対し、下層民のあいだでは相続はさしたる関心事ではなく、また、奴隷にあっては、奴隷解放後に結婚・出産を経験する傾向が強く、親が死亡するころ子は喪主として墓を建てるほどの年齢には達していないことが多かったこともあって、奴隷を含む下層民においては子が親のために墓を建てる事例は少なかったのだろう、と説明している⁽¹⁴⁾。

第2章 イタリアにおける家族関係

本章では、イタリア半島における家族関係のありようを見てみる。

タスマニア大学とオーストラリア国立大学を中心として作成されたローマ期イタリアの家族関係を網羅したデータベースに基づき、P. Gallivan と P. Wilkins の共同論文「ローマ期イタリアの家族構造：地域史的アプローチ」は、帝政前期(アウグストゥス帝期～ディオクレティアヌス帝期)を対象とし、半島を南部・中南部・中北部・北部の4地域に分けて、Saller と Shaw と同様、誰が誰に対して墓を建てたのかを調査し、以下のような結果を得ている⁽¹⁵⁾。

まず、子が登場する墓碑 4335 枚の地域ごとの内訳は、南部：1028 枚(24%)、中南部：1007 枚(23%)、中北部：1430 枚(33%)、北部：870 枚(20%)で、中北部の割合がやや大きいものの、地域による大きな偏りは看取できない。

墓碑に登場する子の数を地域ごとに見てみると、以下のようなになる⁽¹⁶⁾。

表 2

	南 部	中南部	中北部	北 部
子 1 人	81.4%	73.9%	74.0%	70.7%
子 2 人	16.0%	21.9%	20.8%	21.8%
子 3 人	2.2%	3.6%	3.9%	4.8%
子 4 人	0.4%	0.6%	1.3%	2.7%
	100%	100%	100%	100%

どの地域においても子 1 人の事例が全体の 70% 以上を占めている。古代ローマは、医療レベルや衛生環境、食糧事情等の要因があいまって、生き残りの難しい社会だった。人口学の知見から、当時のローマ女性は生涯に平均して 5 人ほどの子を産んでいたと推測されているが、ゼロ歳児の約 30%、1 歳児の約 20% が翌年までに死亡し、無事に 10 歳の誕生日を迎えることのできた子は 40% ほどにすぎなかったという⁽¹⁷⁾。イタリアの墓碑において子の数 2 人以内の事例が 90% 以上を占めるという結果は、ローマの人口学の知見とも平仄が合うものである。なお、子の数 3 人以上の場合を比較してみると、半島を南から北へいくほどその割合が大きくなっていることに、ここでは注目しておきたい。

次に、子の性比を見てみると、息子が登場する墓碑は 2555 枚、娘が登場する墓碑は 1016 枚で、性比は 7 : 3。地域ごとの子の性比は、以下の通りである⁽¹⁸⁾。

表 3

息子 1 人が登場する墓碑：娘 1 人が登場する墓碑
南部 7 : 3、中南部 7 : 3、中北部 7 : 3、北部 2 : 1
息子 2 人が登場する墓碑：娘 2 人が登場する墓碑
南部 8 : 1、中南部 5 : 1、中北部 5 : 1、北部 13 : 1
息子 3 人が登場する墓碑：娘 3 人が登場する墓碑
南部 6 : 1、中南部 3 : 1、中北部 10 : 1、北部 13 : 1
息子 2 人と娘 1 人が登場する墓碑：息子 1 人と娘 2 人が登場する墓碑
南部 3 : 1、中南部 7 : 3、中北部 7 : 3、北部 3 : 2

どの地域においても娘より息子のほうが多いということは瞭然であるが、Gallivan と Wilkins は、息子 1 人と娘 2 人が登場する墓碑が北部で目立って多いことに注意を喚起し、ローマのような家長長制社会では娘は息子よりも嬰兒遺棄される可能性が高かったという通説を疑い、墓碑において娘より息子のほうが多い背景としてはむしろ墓碑建立の習慣のちがいや女子の早婚傾向を考慮にいれるべきだろうと説いている⁽¹⁹⁾。

続いて Gallivan と Wilkins は、親が子に対して墓を建てている割合と子が親に対して墓を建てている割合を調査し、以下のような結果を得ている⁽²⁰⁾。

表 4 親が子に対して墓を建てている割合

	南 部	中南部	中北部	北 部
父母→息子	21.3%	27.3%	21.9%	17.8%
父母→娘	10.6%	14.8%	11.6%	7.9%
父→息子	20.4%	14.1%	18.1%	18.6%
父→娘	9.6%	7.0%	7.7%	7.1%
母→息子	20.0%	17.4%	18.4%	17.9%
母→娘	12.4%	6.8%	8.8%	8.6%
父母→息子と娘(複数)	1.1%	7.6%	6.0%	5.0%
父→息子と娘(複数)	2.1%	1.6%	3.5%	11.4%
母→息子と娘(複数)	2.5%	3.4%	4.0%	5.7%
	100%	100%	100%	100%

表 5 子が親に対して墓を建てている割合

	南 部	中南部	中北部	北 部
息子→父母	10.0%	11.9%	10.5%	16.4%
娘→父母	5.6%	4.0%	3.2%	4.7%
息子→父	16.7%	17.9%	19.1%	9.3%
娘→父	6.7%	8.5%	7.2%	3.3%
息子→母	21.1%	14.4%	17.7%	17.3%
娘→母	12.2%	9.0%	7.2%	5.6%
息子と娘(複数)→父母	7.2%	10.9%	11.9%	21.0%
息子と娘(複数)→父	12.2%	8.5%	13.7%	12.1%
息子と娘(複数)→母	8.3%	14.9%	9.5%	10.3%
	100%	100%	100%	100%

父が子に対して墓を建てている割合と母が子に対して墓を建てている割合を比較すると、父→息子 17.8%、母→息子 18.4%、父→娘 7.9%、母→娘 9.2%、父→息子と娘(複数) 4.7%、母→息子と娘(複数) 3.9%で、大差ない。D. Kleiner は、ローマ社会では家父長が家政を仕切っていたため、母ではなく父が死んだ子のために墓を建てるのが常態だったと説明しているが⁽²¹⁾、この説は、Gallivan と Wilkins が主張するように、少なくともイタリアについては再考の余地があると言わねばならないだろう。

息子が親に対して墓を建てている割合と娘が親に対して墓を建てている割合を比較すると、息子→父 15.8%、息子→母 17.6%、娘→父 6.4%、娘→母 8.5%で、息子が母のため

に墓を建てる割合がもっとも大きく、娘が父のために墓を建てる割合が最も小さい。J.P. Hallett は主に文献史料に基づいて、ローマ社会における父と娘の絆の強さ、家系維持のために母方の出自が果たした役割の重要性を *filiafocality* と呼び、ローマを家父長制原理のみで捉えようとする従来説の視座を批判してみせたが⁽²²⁾、イタリアの墓碑に見える父娘関係に着目した場合、娘が父のために、あるいは父が娘のために墓を建てている割合は小さく、したがって、Hallett 説は支持できない。また、墓碑における祖父母と孫の関係に着目した場合でも、父方祖父母(63%)のほうが母方祖父母(37%)より多く登場し、とりわけ娘とのかかわりでは父方祖父母の割合が71%と高い⁽²³⁾。したがって、母方出自の重要性を強調する Hallett 説はここでも支持できない。

第3章 考察

以上、Saller と Shaw の共同論文および Gallivan と Wilkins の共同論文に拠って帝国西部とイタリア半島の墓碑に見える家族関係のありようを概観してきたが、本章では、これらの研究から得られる知見を批判的に継承することによって、筆者なりの問題提起を試みてみたい。

第1節 墓碑に見える家族関係と世帯

Saller と Shaw の研究手法の問題点について、筆者はすでに別稿で論じた⁽²⁴⁾。要約すれば、①家族関係を刻文した所謂ローマ風の墓碑は、「ローマ化」の及んだ都市部に概ね限られていること、したがって、Saller と Shaw による墓碑の分析結果は、大量の墓碑データに基づいているにもかかわらず、一部地域の都市部の状況を反映しているにすぎないということ⁽²⁵⁾、②墓碑というものは誰かが死亡したころのその人の家族関係を記録しているにすぎず、それ以前それ以後の家族関係のありようを窺い知ることはできないということ、③ Saller と Shaw は墓碑に見える家族関係を数える際に、たとえば夫と妻と息子それに甥が登場する墓碑の場合、核家族関係2例(妻と息子)、拡大家族関係1例(甥)と数えているが、しかし、墓碑に見える家族関係=世帯と仮定して家族形態を論じるのであれば、夫・妻・息子・甥で構成されるこの事例は拡大家族1例と数えるべきであり、したがって、Saller と Shaw が提示した核家族関係の割合は下方修正される必要がある、ということである。

問題点の①については、「ローマ化」の及んでいない農村部などではそもそも家族関係を記録した史料が存在しないため、このような指摘は望蜀の類と言わざるを得ないだろう。問題点の②も同様で、家族関係の変遷を通時的にたどることができるのは、文学史料のなかでそのライフコースが詳細に記述されているエリート層のみなので、このアプロー

チでは結局のところ一般庶民の家族関係が視野の外に置き去りにされることになる。要するに、問題点①と②は Saller と Shaw による分析結果そのものを否定するものではなく、当該分野における史料の限界を再確認するものにすぎないのである。

一方、問題点の③は Saller と Shaw の研究手法を批判するもので、実際 D.B. Martin は帝国東部の小アジアの墓碑を対象にして、そこに見える家族関係を世帯と捉えて算定したところ、核家族関係 57.6%、拡大家族関係 39.7%という結果を得ている⁽²⁶⁾。したがって、墓碑に見える家族関係＝世帯と仮定するならば、Martin の指摘に従って帝国西部の墓碑についても算定し直す作業が求められる。そして、この作業を通じて得られる核家族関係の割合はおそらく、Saller と Shaw が提示した割合よりも小さくなるにちがいない。

しかし、Martin の指摘とかかわって、ここで新たな問題点が浮かびあがってくることになる。それは、そもそも墓碑に見える家族関係を世帯と仮定してよいのか、という問題である。Saller と Shaw は、墓碑に見える家族関係のことを“family unit” “family type” “household”と表現し、世帯と同一視している節がある。実際、かれらは、ヨーロッパではかつて家父長制的拡大家族が主流であったが、時代が降るにつれて直系家族に分解していき、やがて核家族が主流となるに至ったという Le Play の進化論的家族変遷モデルを、根拠のない「神話」として斥けたうえで、以下のように述べている⁽²⁷⁾。

In many areas (though not all) there is no evidence for extended family households being the norm as far back as records go. Of course, for the Roman period we do not have the sort of parish records used by Laslett and others, but we do believe that the tombstone data can shed some light on the important question of family type in the Roman empire. ここで名前のあがっている Laslett は、英国の教区記録(parish records)に見える世帯構造を調査し、英国では産業革命以前においても核家族世帯が主流であったことを明らかにしたケンブリッジ・グループを代表する研究者であるが⁽²⁸⁾、Saller と Shaw は墓碑データから得られる知見がこのケンブリッジ・グループの研究成果に寄与できると主張し、「西ヨーロッパの多くの地域においては、すでにローマ帝国期から核家族が典型であった (it (=the nuclear family) was characteristic of many regions of western Europe as early as the Roman empire)」と結論している⁽²⁹⁾。この行論を見る限り、Saller と Shaw は、墓碑に見える家族関係を世帯と捉えていると判断せざるを得ず、事実、そう判断した Martin は、Saller と Shaw による家族関係の算定方法を前述のように批判したのである。

しかし、たとえば、故人の名前のみが刻文され、誰がその墓を建てたのかが刻文されていない事例は、どのように見なせばよいのだろうか。独居世帯だったのだろうか。それとも、墓が建てられている以上、名前は知られていないが、誰か同居人がいたのだろうか。しかし、もしも後者であるならば、このような墓碑は世帯構成を正確に反映していないこ

とになる。この問題については Saller と Shaw もよく認識していて、故人の名前しか刻文されていない墓碑を分析対象の枠外においているが⁽³⁰⁾、しかし同様の疑問は、墓を建てた人物の名前が刻文されている墓碑についてもあてはまる。たとえば、高齢で死亡した父のために息子が墓を建てている事例で、父と息子の名前のみが刻文されている墓碑の場合、父と息子の二人世帯だったと解釈することも可能ではあるが、25 歳～60 歳までの男性および 20 歳～50 歳までの女性すべてに結婚の義務を課したアウグストゥス帝のユリウス法などを考慮に入れるならば⁽³¹⁾、高齢の父が死亡した時点で息子はすでに結婚していた(自分の家族をもっていた)可能性のほうが高く、そうすると、高齢で死亡した父と墓を建てた息子の名前のみが刻文されているような墓碑は、世帯の構成のみならず家族の顔ぶれすら正確には記録していないことになるのである。

ローマの墓碑には、se vivo 型あるいは sibi 型と呼ばれるタイプの墓が少なからず見られる。これは、ある人物が生きている間に(se vivo)、自分のために(sibi)そして家族のために墓を建てた生前墓のことで、特徴的なのは、まだ存命中の自分や家族の名前を墓碑にあらかじめ刻文していた点である。つまり、これら生前墓であれば、その墓碑が刻文された時点での家族の顔ぶれをある程度正確に記録している可能性が高いと言えよう。とはいえ、生前墓に刻文されている家族は、その墓を建てた人物が自分の家族と認知している人びとのリストであり、これらの人びとは必ずしも同居していたとは限らない、という点には常に留意すべきであろう。

古代ローマの世帯について考察する際に用いるべき史料は、したがって、墓碑ではなくエジプト出土の戸口調査記録(census data)であろう。これは、独特の兄弟姉妹婚がおこなわれていたローマ期エジプトの、しかも一部地域でのみ発見されているパピルスに残る記録で、扱いが難しく、数も少ないが(家族関係が確定できる保存状態のよいものは 167 通のみ)、まさに世帯構成を記録した史料である。ちなみに、この戸口調査記録に見える家族関係の割合は、核家族関係が 51.4%、拡大家族関係が 26.4%で、Saller と Shaw が提示した割合よりも小さいということは注目に値する⁽³²⁾。

以上を要するに、墓碑に見える家族関係は、誰を家族として認知しているのか、家族への情愛や孝心を誰に向けているのか、という心性史的な側面を照らし出したものであり、したがって、ローマ人の倫理観・家族観が元首政の成立を契機として家父長制的・氏族制的なものから核家族的・内省的なものへと変化し、キリスト教の普及以前の元首政期に核家族的夫婦愛と表現しうるような精神風土が形成されていたとする P. Veyne の主張⁽³³⁾を、共和政末期の墓碑に見える家族関係のうち 75%が核家族関係で占められていることを明らかにして、否定してみせた Saller と Shaw の功績は正当に評価すべきであろう⁽³⁴⁾。しかし、墓碑に見える家族関係を世帯と同一視することには十分に慎重であらねばならない。

墓碑に刻文されている家族が同居していたかそうでないかは、結局のところ墓碑それ自体の分析からは明らかにできないからである。したがって、世帯の構成を分析対象としているケンブリッジ・グループの研究成果と帝国西部の墓碑から得られる家族関係に関する知見とを直接結びつけるのは短絡と言わざるを得ず、また、墓碑に見える家族関係＝世帯と仮定して Saller と Shaw の算定方法の見直しを求める Martin の批判も当を得ていないと言わざるを得ないのである。

第2節 イタリア北部の特殊性

イタリア半島を南部・中南部・中北部・北部の4地域に分けて、各地域の墓碑に見える家族関係を分析した Gallivan と Wilkins の研究結果を見て気づくことは、イタリア北部の特殊性である。列挙すると、以下のようになる。

- ①各地域の墓碑に登場する子の数を比較すると、3人または4人の子が登場する墓碑の割合が北部で非常に大きい(表2参照)。
- ②息子1人と娘2人が登場する墓碑の数は北部で目立って多い(表3参照)。
- ③たいていは親が先に死ぬので、子が親のために墓を建てるのが普通の状態と考えられるが、イタリアの墓碑では、親が子のために墓を建てる割合が67.8%、子が親のために墓を建てる割合が32.2%で、逆になっている。しかし、北部では、親が子のために墓を建てる割合(47.4%)と子が親のために墓を建てる割合(52.6%)がほぼ半々となっている⁽³⁵⁾。
- ④子が父母に対して墓を建てている割合は、北部が他の地域の2倍以上となっている(表5参照)。
- ⑤各地域の墓碑のなかで、5歳以下の子を刻文した墓碑が占める割合は、北部が他の地域の半分ほどとなっている(南部21%、中南部21%、中北部23%、北部10%)⁽³⁶⁾。

このようにイタリアの墓碑に見える家族関係を地域ごとに比較すると、北部は他の地域とは異なる傾向を示していることが分かる。Saller と Shaw は、帝国西部における家族関係のありようを比較史の観点から明らかにするために、特殊な傾向を示す地域と典型的な傾向を示す地域をそれぞれサンプリングして分析するという手法を採った(表1参照)。そして、イタリアの典型として Regio 11(イタリア北部)を設定し、その理由について Saller と Shaw は、“the area(=Regio 11)was Romanized but did not have the unusual proportion of servile population found in the city of Rome”と説明している⁽³⁷⁾。確かに、イタリアの墓碑に登場する奴隷または解放奴隷の割合は、南部32.0%、中南部54.0%、中北部30.5%、北部13.0%で、北部の奴隷(または解放奴隷)人口は少ないが⁽³⁸⁾、しかし、イタリアの4地域で比べると、中南部は多すぎ、北部は少なすぎで、この2地域はむしろ

“unusual proportion”を示しているのである。したがって、Regio 11 をイタリアの典型と見なすことはできないということは指摘しておくべきであろう。

Gallivan と Wilkins は、北部で奴隷(または解放奴隷)人口が少ない(13.0%)ことが、上記③の現象の背景にあるのではないか、すなわち、奴隷は解放されて自由身分となつてから子をもうける傾向が強かったのも、もと奴隷の親が死んだとき子はまだ幼いので、奴隷(または解放奴隷)人口の多い地域では子が親のために墓を建てる割合は小さく、他方、奴隷(または解放奴隷)人口の少ない北部ではその割合が大きかったのではないかと推測している⁽³⁹⁾。ひとつの背景説明としてはあり得るものであり、現段階では筆者もこれ以外の説明は思いつかないが、ただし、中南部で奴隷(または解放奴隷)人口が目立って多い(54.0%)にもかかわらず、子が親のために墓を建てる割合は南部や中北部と大差ないという事実をどのように説明すればよいのか、という問題が残る。とりわけ、ローマ市の墓碑を対象にして、解放前の奴隷が内縁関係(concubinatus)や共棲関係(contubernium)を結び、子をもうける事例が少なからずあったことを指摘し、奴隷は解放されて自由身分となつてから子をもうける傾向が強かったとする通説に疑問を投げかけた B. Rawson の研究⁽⁴⁰⁾を踏まえるならば、上記③の現象を、奴隷(または解放奴隷)人口の多寡と奴隷身分の結婚のありように結びつけて説明するのは、いささかためらわれる。Gallivan と Wilkins による背景説明にはいまだ検討の余地があると言えよう。

イタリア北部の特殊性と奴隷(または解放奴隷)人口の問題とかかわって、最後に指摘しておくべきことは、「スプリウスの子」と呼ばれる出生自由人身分(ingenui)の非嫡出子の存在である。共和政期の末ころからローマ市民は、男性ならば3つの名前(個人名・氏族名・家名)、女性ならば2つの名前(氏族名・家名)を名乗るようになり、氏族名と家名の間には「何某の息子」または「何某の娘」という父子関係を表記していた⁽⁴¹⁾。たとえばキケロの名前は「マルクスの息子マルクス・トゥッリウス・キケロ(Marcus Tullius Marci filius Cicero)」で、このように、父の個人名の属格形に「息子」または「娘」を意味する filius/filia を付した父子関係を表記しているローマ市民は、自由身分として生まれた嫡出子であった。一方、「スプリウスの子」とは、たとえば「スプリウスの娘ペトロニア・ユスタ(Petronia Spurii filia Iusta)」のように、共和政半ば以降もはや使用されなくなっていた架空の個人名であるスプリウスが父の個人名に用いられている者たち、つまり、父を持たぬ非嫡出子のことである⁽⁴²⁾。

この「スプリウスの子」の地域分布は、南部3.6%、中南部20.5%、中北部28.6%、北部47.3%で、その割合は南部で目立って小さく、北部で半分近くを占める⁽⁴³⁾。出生自由人身分の非嫡出子は、何らかの理由でローマ法上の結婚(matrimonium iustum)をしていないローマ市民(出生自由人身分か被解放自由人身分かは問わない)の母から生まれる。

母がローマ法上の結婚をしていない理由としては、父が奴隷身分であるがゆえに結婚できないことが多かった。そこから筆者はかつて、「スプリウスの子」と奴隷制とは密接不可分の関係にあるとの想定のもと論を展開したが⁽⁴⁴⁾、そして、その議論自体については今でも修正の必要はないと考えているのであるが、しかし、「スプリウスの子」の地域分布の問題は、奴隷制との関わりのみでは説明し尽くせない。奴隷(または解放奴隷)人口の少ない北部で「スプリウスの子」の数が多いということは、父が奴隷身分だからローマ法上の結婚ができなかったというよりも、父はローマ市民でローマ法上の結婚も可能であったが、それを望まなかったという事態が想定できるからである。

この問題については今後の課題としたいが、現段階で(あくまで見通しとして)言えることは、イタリアの歴史を通じて、非嫡出子の扱いは伝統的に南部で厳しく、その数は南へいくほど少ないという人類学の知見が、「スプリウスの子」の地域分布の問題にも援用できるかもしれない、ということである⁽⁴⁵⁾。したがって、ローマ期のイタリア南部における非嫡出子の処遇を他の地域と比較できるような史料の掘り起こし作業が今後求められるだろう⁽⁴⁶⁾。

もう一点指摘できることは、イタリア北部で *se vivo* 型または *sibi* 型といった生前墓が多いということが、イタリア北部の「スプリウスの子」の数が他を圧倒して多いことの背景にあるのではないか、という見通しである⁽⁴⁷⁾。とりわけ注目すべきは、イタリア北部では、夫が自分と妻のために、または、妻が自分と夫のために墓を建てるという、夫婦間での生前墓がイタリアの4地域で最も少ない反面、親が自分と配偶者と子のために、または、子が自分と配偶者と親のために墓を建てるという、世代間での生前墓が多いことである⁽⁴⁸⁾。つまり、イタリア北部の墓碑は、他の地域に比べて故人とその墓を建てた者の名前だけでなく、故人の家族や墓を建てた者の家族の名前も刻文している頻度が高いということである。南部にくらべて北部では非嫡出子の処遇がそれほど厳しくなかったことに加えて、北部の墓碑では家族の顔ぶれをより詳細に刻文する習慣があったという状況を想定すれば、「スプリウスの子」の数が南部で少なく北部で多いことをある程度説明できるのではないかと現段階では考えているが、この問題については別稿で論じたい。

注

- (1) R. MacMullen, *The Epigraphic Habit in the Roman Empire*, *AJPh* 103(1982), pp.233-246.
- (2) D. Jones, *The Economy of the Roman Empire: Quantitative Studies*, rev. ed., Cambridge, 1982, pp.99-101. 北アフリカに駐屯していたローマの軍団兵が建立した比較的上等な墓石は、かれらの年収の約2%ほど、南イタリアのプテオリやクマエの下層民の埋葬費用は約50~60 セステルティウスだったという。なお、小麦の価格で円換算すると1 セステルティウスは400円ほどである。

- (3) *Digesta*, 11.7.3-5(Ulpianus).
- (4) Petronius, *Satyrice*, 71.
- (5) R.P. Saller and B.D. Shaw, Tombstones and Roman Family Relations in the Principate: Civilians, Soldiers and Slaves, *JRS* 74(1984), pp.124-156.
- (6) B.D. Shaw, Latin Funerary Epigraphy and Family Relations in the Later Empire, *Historia* 33(1984), pp.457-497; Id., The Family in Late Antiquity: The Experience of Augustine, *Past and Present* 15(1987), pp.3-51 は、帝政後期の墓碑と教父の著作を分析して、そこでもやはり核家族関係が中心となっていることを再確認している。なお、本稿では紙幅の都合上、帝政後期については扱わない。
- (7) Saller and Shaw, op. cit., Table 1-32 より作成。
- (8) Ibid, p.132.
- (9) Ibid, 139-145. 兵士の場合、墓碑建立への家族や親族の関与が少ない分、同僚兵士(*com-miles*)の関与が多くなっている。なお、Saller と Shaw は言及していないが、そもそも軍団兵は、アウグストゥス帝からセプティミウス・セウェルス帝の時代まで、兵役中の婚姻を禁じられていたことも、兵士の墓碑において核家族関係の割合が全体的に見て小さいことの背景として指摘できるだろう。兵役中の婚姻禁止をめぐる議論については、B. Campbell, The Marriage of Soldiers under the Empire, *JRS* 68(1978), pp.153-166 が詳しい。ローマ市の一般兵の墓碑において核家族関係の割合がある程度高い(61%)のに対して、騎兵のそれが小さい(29%)ことについて Saller and Shaw, op. cit., p.134 は、騎兵は結婚している場合であっても、妻ではなく同僚兵士を相続人に指定しているほど隊への帰属意識が強かったため、と説明しているが、その論拠となる史料はわずか5例にすぎず、いささか説得力に欠ける。
- (10) Th. Mommsen, Die Conscriptionsordnung der römischen kaiserzeit, *Hermes* 19(1884), pp.1-79; 210-34(筆者未見). Cf. Id., *Gesammelte Schriften*² VI, Berlin, 1910, ch.3.
- (11) 研究史の詳細は、樋脇博敏「ローマの家・家族・親族」『西洋古代史研究入門』(伊藤貞夫・本村凌二編、東京大学出版会、1997年)、184-186頁を参照。なお、この評価の当否については、本稿第3章であらためて論じる。
- (12) Saller and Shaw, op. cit., pp.138f. 女性(妻、母、娘、姉妹)が墓を建てている割合は以下の通り。ラティウム地方：25%、Regio 11：13%、ガッリア・ナルボネンシス：33%、ヒスパニア：42%、ブリタニア：19%、下ゲルマニア：22%、上ゲルマニア：29%、ノリクム：16%、ランバエシス：25%、アウジア：37%、カエサレア：34%、オステティア：23%。
- (13) Strabo, 3.2.9; 3.4.17; Silius Italicus, *Punica*, 3; Justinus, 44.3.7.
- (14) Saller and Shaw, op. cit., p.138. 子が親のために墓を建てている割合は、ローマ市の元老院階層：30%、ローマ市の下層民：11%、ローマ市の奴隷：11%、カルタゴの奴隷：10%、ノリクムの奴隷：13%。
- (15) P. Gallivan and P. Wilkins, Familial Structures in Roman Italy: A Regional Approach, in B. Rawson and P. Weaver (eds.), *The Roman Family in Italy: Status, Sentiment, Space*, Oxford, 1997, pp.239-271. なお、4地域と Regio との対応は以下の通り。南部(Regio 2, 3：アプリア、ルカニア、ブルッティウム)、中南部(Regio 4, 5：サビナ、サムニウム、ピケスム)、中北部(Regio 6, 7, 8：ウンブリア、エトルリア、ガッリア・キスパダナ)、北部(Regio 9, 11：リグリア、トランスパダナ)。
- (16) Gallivan and Wilkins, op. cit., Table 10.1-2 より作成。ただし、「息子たち *fili*i」とか「兄弟たち *fratres*」といった具合に親族名称の複数形でのみ記されているため、子の実数が不明の事例は除いた。
- (17) 長谷川岳男・樋脇博敏『古代ローマを知る事典』(東京堂出版、2004年)、212-215頁。

- (18) Gallivan and Wilkins, op. cit., Table 10.3-5 より作成。
- (19) Gallivan and Wilkins, op. cit., p.243.
- (20) Gallivan and Wilkins, op. cit., Table 10.7-8 より作成。
- (21) D. Kleiner, Women and Family Life on Roman Imperial Funerary Altars, *Latmos* 46(1987), p.549.
- (22) J.P. Hallett, *Fathers and Daughters in Roman Society*, Princeton, 1984, passim.
- (23) Gallivan and Wilkins, op. cit., Table 10.9-10.
- (24) 樋脇博敏「ローマの家・家族・親族」187-188 頁、同「ローマの家族」『岩波講座 世界歴史 4 地中海世界と古典文明』(岩波書店、1998 年)、273-294 頁。
- (25) たとえば、前 1 世紀初めにローマ植民市となり、ローマの都市制度を導入していたポンペイでは、いわゆるローマ風の墓よりも columella という土着の墓のほうが頻繁に利用されていた。columella とは人間の上半身をかたどった石板型の墓で、ポンペイ周辺で約 400 基が発見されており、このうち銘が刻文されているものは 170 基ほどにすぎず、家族関係が刻文されている事例はさらに少ない。Cf. Mónica Saldías, Det pompejanska begravningslandskapet efter Sulla. En undersökning av identitet och social status inför döden, *CD-paper in Classical Archaeology and Ancient History* (University of Uppsala, <http://www.arkeologi.uu.se/aks/education/CD/Saldias.pdf>), 2003, pp. 11-13, 37f.
- (26) D.B. Martin, The Construction of the Ancient Family: Methodological Considerations, *JRS* 86(1996), pp. 40-60.
- (27) Saller and Shaw, op. cit., p.124.
- (28) P. Laslett and R. Wall(eds.), *Household and Family in Past Time*, Cambridge, 1972.
- (29) Saller and Shaw, op. cit., pp.145f.
- (30) Saller と Shaw は、故人の名前のみが刻文されている墓碑を分析対象の枠外においている一方で、以下のように説明している(Saller and Shaw, op. cit., p.133)。“...there is no reason to believe that those without named commemorators belong to any special or unusual group; rather, the practice seems to be linked to wealth, and cultural and ideological influences.”確かに、Saller と Shaw が言うように、故人の名前のみが刻文されている墓碑のなかには、十分な大きさの墓石を購入する経済的余裕がなく、その結果、故人の名前だけが刻文された事例も含まれているだろうし、また、ポンペイ周辺に見られる columella のように故人の名前と享年のみを刻文する習慣の地域もあっただろう(注(25)を参照)。しかし、故人の名前のみが刻文されている事例のすべてを経済的・文化的・イデオロギー的影響で説明することはできないだろう。
- (31) 船田亨二『ローマ法 第四巻』(岩波書店、1971 年)、65 頁。
- (32) 樋脇博敏「ローマの家族」279 頁。
- (33) P. Veyne, La famille et l'amour sous le Haut-Empire romain, *Annales E.S.C.* 33(1978), pp.35-63.
- (34) Saller and Shaw, op. cit., pp.134f.
- (35) Gallivan and Wilkins, op. cit., p.245.
- (36) Gallivan and Wilkins, op. cit., p.247. なお、Gallivan と Wilkins は、この現象に関する背景説明をおこなっていないが、北部では、子が両親のために墓を建てている割合が他地域に比べて大きく(表 5 参照)、おそらくは両親の死を待って墓を建てる習慣があった、つまり、墓を建てる時点で子はある程度の年齢に達していたため、幼い年齢の子の割合が北部では小さいと推測できる。
- (37) Saller and Shaw, op. cit., p.134.
- (38) Gallivan and Wilkins, op. cit., p.249.

- (39) Gallivan and Wilkins, op. cit., p.245. 奴隷(または解放奴隷)人口が多かった Latium と少なかった Regio 2 でも同様の傾向が看取できる。親が子のために墓を建てている割合は Latium が 36%、Regio 2 が 21%、子が親のために墓を建てている割合は Latium が 4%、Regio 2 が 26% で、この現象について Saller and Shaw, op. cit., p.138 もまた Gallivan と Wilkins と同様の説明をしている(注(14)および本文を参照)。
- (40) B. Rawson, Family Life Among the Lower Classes at Rome in the First Centuries of Empire, *Classical Philology* 61(1966), pp.170-200.
- (41) J.E. Sandys, *Latin Epigraphy I: An Introduction to the Study of Latin Inscription*, London, 1927, pp.207-221.
- (42) B. Rawson, Spuria and the Roman View of Illegitimacy, *Antichthon* 23(1989), pp.10-41; 樋脇博敏「古代ローマの非嫡出子研究」(博士論文、東京大学、1995年)。
- (43) 本論で提示した地域分布は、Gallivan と Wilkins のデータと比較しやすいように、「スプリウスの子」が登場する 112 基の墓碑がイタリアの 4 地域にどのように分布しているかを示したものである。なお、「スプリウスの子」が登場する墓碑が各地域の墓碑に占める割合は、南部 0.13%、中南部 0.55%、中北部 0.31%、北部 0.60% である(樋脇博敏「古代ローマの非嫡出子研究」表 3-4 より作成)。
- (44) 樋脇博敏「古代ローマの非嫡出子研究」第 5 部第 4 章、同「『名無しの権兵衛の娘』と自称する女」(『史論』53 号、2000 年)、1-27 頁。
- (45) R.P. Saller and D. I. Kertzer (eds.), *The Family in Italy*, New Haven / London, 1991, pp.18f.
- (46) 具体的には、イタリア南部を舞台にした『サテュリコン』などの文学史料や、同じくイタリア南部で生じた民事案件を扱った法史料の比較検討が考えられる。
- (47) Saller and Shaw, op. cit., p.126 によれば、生前墓が多く見られる地域は、イタリア北部、ノリクム、ラエティア、ガッリア・ナルボネンシス東部だという。
- (48) Gallivan and Wilkins, op. cit., p.249. 夫婦間の生前墓の割合は、南部 32%、中南部 43%、中北部 21%、北部 4% である。

〔現代教養学部教授(古代ローマ史) 2001~03 年度個人研究員〕

